

「蓮と日中友好の道―ロータスロード展」開幕式

二階 俊博 講演原稿（約30分）

日時：2026年6月22日（月）10:30～12:00 会場：中国文化センター

一 開会の「挨拶

（目安：約3分）

本日は、「蓮と日中友好の道―ロータスロード展」の開幕式にお集まりいただきました皆様に、心より御礼を申し上げます。

私にとって、「蓮」というテーマと「日中友好」というテーマは、これまでの政治人生を通じて、まさに心の軸であり続けてきたものでございます。その二つが一つの「ロータスロード展」として結実したことは、誠に感慨深いものがあります。

今日この機会に、私と蓮との深いかかわりについて、また、蓮が日中の絆を育んできた歴史について、そして今後この「ロータスロード」の精神をどのように未来へ繋いでいくべきか、皆様とともに考えたいと思います。

二 蓮との出会い―恩師と故郷・和歌山の記憶

（目安：約5分）

私と蓮の花との関わりの出発点は、高校時代の恩師とのご縁で
ございます。

私に生物を教えてくれた阪本祐二先生は、大賀蓮を発見された
大賀一郎博士の愛弟子でありました。和歌山の高校で生物を教える
かたわら、大賀博士の遺志を継いで蓮の研究を熱心に続けておられ
た先生です。私が県会議員になったころ、その阪本先生から一つの
ご依頼をいただきました。地元・美浜町の日の岬にあった大賀蓮の
池の改修についてのお願いでした。

私は文教委員長として現場を視察し、冷たい水が池に流れ込ま
ないよう対策を講じ、大賀蓮の育成に予算を確保するとともに、岩
出町の緑化センターに新たな蓮の池を造ることにしました。これが
私と大賀蓮との、最初の実践的な関わりでした。

私は阪本先生に申し上げたことがございます。「先生、中国へ
いかれたらどうですか。そして大賀蓮を中国の地に咲かせたらどう
ですか」と。当時は日本から中国への渡航も容易ではありませんで
した。残念ながら、実現しないうちに、先生はお亡くなりになりま
した。その無念の思いが、私をその後の蓮の活動へと突き動かして
きたとも言えます。

先生が亡くなられた後、私は先生の奥様とともに、一九八一年
(昭和五十六年)、中国・杭州の西湖に大賀蓮を植えることができ
ました。日中友好の願いを込めた、一つの悲願の達成でした。しか
し当時はまだ文化大革命の余燼がくすぶる時代。その蓮の池は、や
がて紅衛兵によって無残に破壊されてしまいました。それでも私は
諦めませんでした。

三 大賀蓮の奇跡―二千年の眠りから覚めた花

(目安：約7分)

皆様は「大賀蓮」をご存じでしょうか。昭和二十六年（一九五一年）、千葉県の大東大検見川グラウンドで、大賀一郎博士が約二千年前の蓮の種子の発芽・開花に成功された、奇跡の蓮でございます。

発端は、その地で石器時代の丸木舟が発見されたことでした。ラジオカーボン測定によると三千年前のもの。その後の発掘で、蓮の実が見つかったのです。博士はその種子を丁寧に育て、苦難の末、翌年見事に開花させました。二千年以上の眠りから覚めた、紅色の清らかな花。このニュースはアメリカの「タイム」誌にも大きく取り上げられ、この古代蓮は「大賀蓮」と命名されました。

大賀博士は、戦前の一時期に満鉄の講習所で教鞭を取っておられたことがありました。そのとき、大連郊外の普蘭店の遺跡で発見された一千年前の化石のようになっていた蓮の実を中国の友人から手に入れ、研究の結果、古代蓮の存在を確信するに至りました。これが、大賀博士が蓮の研究に邁進するきっかけになったのです。大賀博士は一高時代に内村鑑三の薫陶を受けたクリスチャンでもあり、「蓮は平和の象徴なり」を生涯の信条とされてきました。とくに蓮研究のきっかけを与えてくれた中国との友好には格別な心を砕き、大賀蓮が平和の使者として中国の大地に咲く日を心待ちしておられました。しかし昭和四十年、その思い半ばにして残念ながら「逝去されました」。

今回の展覧会では、大賀蓮のほか、大連・普蘭店で発見された千二百年前の種から蘇った「飛天古蓮」、孫文が日本の友人・田中隆氏へ贈った「孫文蓮」、そして大賀博士が郭沫若氏へ送った「大

賀蓮」と中国の「古蓮」を掛け合わせて生まれた「中日友誼蓮」も紹介されています。これらはどれも、自然の神秘と人の友情が結びついた花なのです。

蓮という植物は、数百年・数千年を経てもなお、種が生命力を保ち、再び花を咲かせます。どんな逆境にも屈しない生命力の象徴です。これは、たとえ時代が変わり、両国の関係が難しい局面を迎えることがあっても、日中の絆は決して絶えることなく、必ずや再び花開くという希望の象徴でもあります。

四 「俊博友誼蓮」と、私の大賀蓮普及の歩み

恩師・阪本先生の遺志を引き継いだ後、私は議員生活を通じて、中国各地に大賀蓮を移植し続けてきました。

二十数年ほど前には中国・杭州植物園に大賀蓮を移植し、日中友好の一助としました。二〇〇四年には、大賀博士の古蓮研究の原点となった大連・普蘭店の古蓮研究所に大賀蓮を移植しました。大連市からは榮譽市民の称号をいただいた縁のある地です。二〇〇五年三月には、海南島のボアオ・アジアフォーラム常設会場に、蔣曉松副理事長をはじめ関係者のご協力のもと、「大賀蓮」「中日友誼蓮」「舞妃蓮」の三種類の蓮根を日本から移植し、「ボアオ東方文化苑・蓮花館」が完成しました。

二〇〇七年には日中国交正常化三十五周年の記念事業として貴州省貴陽市に、二〇一二年には四十周年記念として陝西省西安市に、それぞれ大賀蓮を移植しました。また、二〇〇九年には客員教授の

称号をいただいた大連東北財經大学に、二〇一九年には名誉教授の称号をいただいた北京の清華大学に、それぞれ大賀蓮を贈りました。清華大学では2018年に私の自伝『大賀蓮世界に花開く』の出版記念イベントも開催していただき、翌年日本の書籍五百冊とともに大賀蓮を移植することができました。

中国だけではありません。国花が蓮であるベトナムのハノイとダナン、インドのデリー、ミャンマーのヤンゴンにも大賀蓮を移植しました。蓮はまさに「アジアの花」なのです。二〇一五年には外務省の協力を得て、外務省の中庭の池に平和への願いを込めて大賀蓮を移植し、毎年開花の様子を報告していただいています。

蓮はアジアの文化の底流に深く根付いています。ベトナム航空のシンボルマークも蓮の花です。インドのモディ首相率いる保守政党内のシンボルマークも蓮の花です。ハノイの国会議事堂建設予定地から出土した三百年・五百年前の瓦にも、蓮の花が刻まれています。蓮は時代を超え、国境を超えて、人の心を結んできた花なのです。

そして今回の展覧会において、私はまことに光栄なことに、「俊博友誼蓮」という名を賜りました。大連市普蘭店区古蓮研究所の徐鋼所長のご提案により、「飛天古蓮」と「舞妃蓮」を交配して生まれた新種に、私の名をつけていただいたのです。あまりにも過分なお言葉に、最初は恐縮するばかりでした。しかし、その背後にある徐所長はじめ皆様の日中友好への熱い思いを感じ、謹んでこの名を受け取らせていただいた次第でございます。

五 日中のキズナ強化の重要性

(目安：約5分)

私は長年にわたり、日中関係の発展に微力を尽くしてまいりました。それは単なる外交上の義務感からではありません。日本と中国は、地理的に最も近い隣国であり、歴史・文化・経済の面において深い絆で結ばれた、切っても切れない関係にある国です。

日中国交正常化以来、両国の関係は幾多の浮き沈みを経てきました。しかし私は常に申し上げてきた。「友好の土台は、政府間の交渉ではなく、民間の人と人との交流にある」と。政治家同士が会議室でいくら議論を重ねても、それだけでは本当の信頼は生まれません。市民が互いの文化を知り、芸術を鑑賞し、ともに笑い合う。その草の根の交流こそが、両国関係の真の礎となるのです。

大賀博士と郭沫若氏の交流も、孫文から田中隆氏への蓮の贈り物も、徐鋼所長による「俊博友誼蓮」の命名も、いずれも政府の指示でもなく条約の義務でもなく、人と人との純粋な信頼と敬意から生まれたものです。こうした民間の絆の積み重ねこそが、外交の嵐にも揺るがない日中関係の根幹を形作るのだと、私は確信しています。

今、アジアひいては世界の平和と安定のために、日中両国が果たすべき役割はますます大きくなっています。人口十四億を超える中国と、技術力・民主主義の経験を持つ日本が、対立や不信ではなく、協力と信頼の関係を築くことは、両国民のみならず、アジア全体、世界全体の利益に直結します。そのためにも、文化・芸術・学術の交流を絶やさないことが何より大切です。

六 大賀蓮を日中の懸け橋に―「ロータスロード」の未来

(目安：約2分)

なぜ「蓮」が日中関係の懸け橋になりうるのでしょうか。

仏教文化を通じ、蓮は日本でも中国でも「清廉・純粹・再生」の象徴として深く根付いています。互いの文化の中に同じ花を見出す。それだけで、「同じ文化的土壌に立っている」という連帯感を覚えることができます。これは、抽象的な外交の言葉より、ずっと力強いメッセージではないでしょうか。

私は提言したいと思います。この「ロータスロード」というコンセプトを、一つの展覧会に留めるのではなく、継続的な文化外交の柱として育てていただきたいのです。「ロータスロード」を国際的な友好交流ルートとして発展させ、研究者・学生・市民が行き来する機会を増やしていく。そうした取り組みが、二十一世紀の日中関係を豊かに彩るものになると確信しています。

幸いにも今回の展覧会は、千葉市、観光関係団体、大連市普蘭店区古蓮研究所、上海辰山植物園など、日中双方の多様な機関が協力して実現しました。これはまさに「ロータスロード」構想の萌芽であります。「アジア蓮ネットワーク」の構築も、もはや夢ではありません。

七 結びに―次の世代へ

(目安：約2分)

大賀博士は「蓮は平和の象徴也」という揮毫を残されています。

博士は平和への願いを蓮の花に託し、毎年初夏のころ、私たちに平和の尊さを語りかけてくれているような気がしてなりません。

蓮の花は、泥の中から芽を出し、どんな逆境にも負けず、清らかな花を咲かせます。日中関係も、どんな困難があっても、その根を大切にする限り、必ずまた花を咲かせる。私はそう確信しています。

私はもう長く政治の道を歩んでまいりましたが、年を重ねるほどに、「次の世代に何を残すか」ということを考えるようになりました。制度や条約は法律の言葉で書かれています。しかし本当の意味での友好は、心に刻まれる体験によって受け継がれていくものです。

この展覧会を訪れた一人ひとりの心に、蓮の花のような清らかな日中友好の精神が宿ることを、私は心から願っております。本日も来場の皆様の中には、日中友好の未来を担う若い方々も多くおられると存じます。どうか「ロータスロード」の精神を受け継ぎ、蓮の花のように力強く、清らかに、日中の架け橋として活躍して下さることを期待してやみません。

最後に、この展覧会の開催にご尽力された中国文化センターの皆様、後援・協力いただいたすべての機関・団体の皆様に改めて深く感謝申し上げます。そして本日も来場の皆様のご健勝と、日中両国の友好関係の一層の発展を心よりお祈り申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。